

奥多摩の森



# 奥多摩

《第34号》

平成26年7月15日  
奥多摩観光協会



《鳩ノ巣駅》

木版画 安藤修二

## ～ 木造りの奥多摩5駅 ～

奥多摩町の94%を占める森林は貴重な観光資源となっていて毎年多くの方がこの森林や山を目的に訪れてくださいます。この森林は、森林セラピーや登山に来られる方の活動場所となっていますが、森林の持つ機能のひとつである木材の供給場所でもあります。

最近、奥多摩町を訪れる方の多くはJRを利用されてきますが、関東の駅100選に入っている奥多摩駅をはじめ、観光客の方々をお迎えする町内のJR5駅すべてが木材で造られています。

木材は心を落ち着かせ癒す効果もありますので、電車を降りた観光客の皆さんは自然の景観もさることながら、各駅に降りた段階で心も落ちつくのではないかと思います。

この駅の管理はJRで行っていますが、山間の町にある駅ということで、全面改築された3駅(古里駅、白丸駅、川井駅)も木材を基本とした造りです。奥多摩駅や鳩ノ巣駅の改修も元の景観や構造を配

慮したものとなっています(JR東日本の方々に感謝…)。特に奥多摩駅と鳩ノ巣駅は周りの景観ともマッチした山小屋風の建物で、御嶽神社をモチーフとした御嶽駅と合わせた3駅は、青梅線の代表的な木造駅といえます。

さて、この青梅線は昭和19年7月に御嶽駅から氷川駅(現在の奥多摩駅)まで延長され、はじめて町内に電車が走ることになりました。青梅線は沿線の日向和田、二俣尾、日原の石灰石を輸送するため建設された鉄道ですが、立川～青梅間の開通は古く、明治27年11月には開通しています(中央線の新宿～八王子間は明治22年に開通)。

その後、大正3年に日向和田駅迄、大正9年に二俣尾駅迄、昭和4年に御嶽駅迄延長され、昭和19年に現在の24駅、37.2Kmの姿となりました。

(奥多摩観光協会事務局長 加藤 博士)

# ～とっておきの山歩きガイド～

## ～涼を求めて日原をあるく～

特に暑い夏の奥多摩で訪れて頂きたいメインスポットは、リニューアル（照明をLED化）した日原鍾乳洞です。洞内は年間を通じ11度で夏涼しく、冬暖かく、石灰石と雨水による大地の芸術品、神秘的な地中の旅をおよそ40分～60分間体験する事が出来ます（夏季はしずく・寒さ対策にヤッケかカッパ等を用意した方が良いでしょう）。

この鍾乳洞は古くは一石山御岩屋（一石山大権現）と言われ大日如来を崇めるための場所として修験者や大勢の参拝者が訪れたところで、洞窟そのものが権現の社殿であり、鍾乳石や石筍は仏菩薩であり、蓮華であり、香炉だったのです。

ムシムシとした暑い夏のひとときを天然のエアコンの中で過ごすのも、如何でしょうか。

鍾乳洞のある日原地区には、他に数々の巨樹（ヒノキ・トチ・ミズナラ・モミ・カツラ）、神社（一石山神社・熊野神社・丹生神社・水神社）、巨岩（梵天岩・籠岩・燕岩）、森林館、溪流釣場があり、色々と

楽しむ事が出来ます。

しかしながら残念な事に、今冬の雪害により山道が崩壊し、通行止めが多いので、コースプランを決める際は、奥多摩観光協会か地元を確認する様お勧め致します（鍾乳洞は雪害に遭わず無事です）。

順路はバスで終点の鍾乳洞で降りて鍾乳洞を見てから日原地区を楽しんでも、東日原で降りて日原地区を楽しんでから鍾乳洞へ行っても良いでしょう。

但し、バスは1～2時間に一本なので要注意。

それでは一般的ルートの一例を参考にご紹介致します（現在：巨樹コースが雪害の為通行止め）。

東日原～森林館～巨樹コース～水垂のトチ～一石山神社～日原鍾乳洞～（日原街道を戻って）～山の神～熊野神社～丹生神社～東日原

★路線バス 奥多摩駅～鍾乳洞(30分・500円)

奥多摩駅～東日原(25分・460円)

(田中 信義)

## ～奥多摩三山・三頭山～

5月11日に三頭山に登りました。行楽シーズンとなり、武蔵五日市駅は登山者でいっぱいです。

9時発の数馬行のバスは4台くらい増発し、満員のお客をのせて出発しました。

数馬で、都民の森行のバスに乗り換えるのですが、私達のバスは直行便でした。帰りには売り切れてしまうので、売店の“わらび”をみんなで買い、預けて置き、いざ出発です。

森林館に続くトンネルをくぐり、鞆口峠に出て回廊の道に入ります。栈道になっていて、所々木が古くなっているので注意し、新緑の中を歩きました。エイザンスミレが時々あり、きれいでした。

途中でブナの道に入り、急登を行くと尾根道に出て、また二度ほど登ると展望台に出ます。

ユキザサの白い花が咲いて、ブナの新緑は見ごたえあります。ここは秋に素晴らしい黄葉が見られます。東峰に着いて、ベンチがありここで昼食となりました。

東峰(1528m)からひとくだけりして分岐、又カザス山から奥多摩湖に下るコースがあります。ひと

のぼりして山頂(1531m)に、奥多摩湖が見え、雲取山から飛龍山が見えます。三ツ峠を右に御正体山を左にその真ん中に富士山が見えます。

ヤマツツジが山頂を色彩っていました。

山頂から鶴峠に出るコースもあります。丸太の階段が延々と続き分岐点のムスカリ峠近くまであります。ここが登りだと疲れますので、下りにおすすめです。避難小屋は急な雨の際利用でき便利です。

ムスカリ峠付近は、ムスカリの真っ白な花が沢山咲いてきれいです。ここは夏にはレンゲショウマが沢山咲きましたが、最近は少なくなりました。ここから沢沿いの道は沢の流れがこち良い所です。

野鳥観察小屋の分岐を過ぎ、大岩の上にタマガワホトトギスが咲きます。登りに観察小屋のコースもおすすです。

四季折々の花が見られる三頭山にぜひお出かけください。初心者は大滝までのコースが楽しいです。

★路線バス 五日市駅～数馬(56分・940円)

数馬～都民の森(15分・無料)

(原 明子)

## ～ 四季つづれ その6 ～

### 「アルプと串田孫一」

かつて『アルプ』という雑誌があった。日本の登山隊がマナスルに初登頂をし、若者の登山ブームとなって、高度経済成長に沸く1958年(昭33)に創刊された山の月刊誌である。私は高校2年生から登山を始めたが、東京に出てくるまでその存在を知らなかった。67年に書店で初めて手にしたのが『アルプ』111号「高原」の特集であった。創文社から出版されたこの『アルプ』は、書店に氾濫する他の情報誌、女性誌とは見た目からして明らかに違っていた。雑誌にして上質な紙を使い、その清楚な装丁。版画、挿画、写真の配置。余白や行間、文字にさえ気品が感じられた。内容にしても爽やかな高原の風を感じさせる詩情に富んだ作品の数々であり、私はすっかり虜になってしまった。

『アルプ』とは、アルプスの高原牧草地で、人間世界と高峰とをつなぐ中間地帯、豊饒な草原の意だという。哲学者、文学者、登山家などの多面体の顔を持つ串田孫一が編集の中心となり、山の詩人、山岳文学の古典「山の絵本」の作者、尾崎喜八を顧問格に据え、紀行、随筆、詩、画文、写真などで構成された、純粋な山の文芸誌であった。

寄稿者の名前を見ただけでもそのそうそうたるメンバーに驚かされる。私が名前を知っている人だけでもここに書ききれないほどいる。少し紹介すれば詩人では草野心平、山本太郎、鳥見迅彦、田中清光など。画文では畦地梅太郎、大谷一良、辻まこと、熊谷榎、上田哲農など。写真では三宅修、内田耕作などであった。そして明治生まれの重鎮は武田久吉、田辺重治、冠松次郎、深田久弥などである。

特に私は『アルプ』誕生の核であり、その中心的役割を果たした串田孫一の文に傾倒した。草原に憩うような安らぎと、山の中の沼のような深みをたたえ、読めばほのぼのとした印象で、なぜかホッとした読後感に浸ることができた。それよりもこの人の博識には驚く。あらゆるものに興味を示し、深く勉強したのであろう。

私は青春真っただ中の多感な時期に『アルプ』に巡り合い、それらの作者の本を読みあさり、登山に熱中したので

ある。テレビもない四畳半1間のアパートで午前0時、ラジオFM東京から流れる城達也の「ジェットストリーム」を聞き眠りに落ち、日曜日の朝はタイムスイッチでFM東京から流れる串田孫一の「音楽の絵本」。物憂げな静かな語り口の詩の朗読と音楽が織りなす心の調べを布団の中に聞いた。

大和書房の串田孫一著作集を買った。山、博物誌など6冊からなる紀行文や随筆などが収められている。その中の1編に「花嫁の越えた峠」という紀行文がある。夜遅く山から下りて来て泊まった山間の、小集落にある宿のおかみさんが語った話である。今は越える人もないが、昔は花嫁も峠を越してこの集落へ嫁になって来たものだと言う。それが「花嫁の越えた峠」である。峠にはいつも人間の匂いが漂っている。私は感銘を受けた。奥多摩にも今はもう忘れ去られようとしている峠も多く存在する。その昔、人々が甲斐や秩父の国から武蔵の国に足しげく越えていたであろう峠を、私も越える山行がしばらく続いた。

創刊された際、『アルプ』の性格について串田孫一は「ここよりもなお高い山へと進み、山から下って来たものが、荷を下ろして憩わずにはいられないこの豊饒な草原は、山が文学として、また芸術として、燃焼し結晶し歌となる場所でもあると思う。従って高原逍遥のみに満足する趣味を悦んでいるものでもない。」と控えめに述べている。そして『アルプ』は当時の若者に支持され、山の文化史に大きな役割を果たした。

25年間輝き続け『アルプ』は1983年(昭58)2月、300号をもって終刊をむかえた。25年の歳月は、明治生まれの深田久弥、尾崎喜八、冠松次郎、上田哲農などが次々と鬼籍に入り、大正生まれの辻まことまでが逝ってしまった。その空白を埋めるだけの新しい書き手が育たなかったし、読者もそれなりに年老いていった。四半世紀のうちに自然環境はもちろん、登山者の気質や傾向も変化した。「山の芸術誌として時代の役割を終えた」というのが終刊の理由であった。

「山の月刊誌として、地味ながら味わいのある雑誌が一つ消えていく」「さわやかながら、永年のファンにはちょっとさびしい「勇退」である」など、各新聞にその終刊を惜

## ～奥多摩 むかしみちの昔話～

しむ好意的な記事が掲載された。

『アルプ』が終刊となって2年後、私はひょんなことから串田さんと近づきになる機会を得た。串田さんとは九段の私立暁星小学校時代からの同級生で、同人誌『冬夏』にも参加した画家、中川幸永さんと知り合ったのである。私は中川さんを通して串田さんのサイン入り著書を何冊も戴いた。その度礼状を差し上げると、丁寧に返事の葉書が届くのである。一度中川さんを介して小金井の串田邸をひとりで訪問したことがある。串田さんは書齋に招き入れてくれた。私は固くなって何を話したかよくは覚えていないが、「花嫁の越えた峠」に感銘を受け、峠越えをやっているというようなことを話したような気がする。本に囲まれた書齋の隅に竖琴が置かれてあった。あれがアイリッシュ・ハープなのだろうかとも今も思い出す。私が辞するとき串田さんは最近出版された著書にサインをして持たせてくれた。その日付は1987年6月25日とある。

後年、私が上梓した「奥多摩登山考」をお送りすると、葉書のお礼の後に「それよりもお手紙により、私は大きなことを忘れていたような気がしてなりません。」と書かれてあった。何のことだったか思い出せない。これが串田さんとの最後の通言になってしまった。中川さんはもっと早くに亡くなられたし、串田さんは2005年7月8日鬼籍に入られた。

300とも400冊とも言われる串田さんの著作。私も50冊以上は持っていると思う。串田さんから戴いた何冊かのサイン本は私の若き日の宝物である。

からまづは今

雪の中

あの秋のこがね色

あの春の あのにほひ 串田孫一

(元 青梅警察署山岳救助隊副隊長 金 邦夫)

・発行：奥多摩町教育委員会

・協力：奥多摩民話の会

### 梶木 (サイカチギ)

わしは氷川の宿から登りつめた峠に、どっしりと根をおろす、さいかちの木じゃ。

大むかしから、ここを通る村の衆のよい目印にされ、それでこの峠に梶木(さいかちぎ)という名がつけられたようじゃ。

むかしはさびしい峠じゃったが、いつのころからか、小河内方面の村の衆が、背に炭をしょって、ここを登ってくるようになった。若い娘が5~6人、一列になって登ってきては、よくわしの根本で休んだもんじゃった。

娘たちが休むと、にぎやかなもので、村の若い衆のうわさ話や、氷川宿の店の話、おまつりや、お日まちの話など、絶えることがなく、それは楽しそうなもんじゃった。

それから道がよくなって、大八車が荷をたくさん積んで、登ってきた。

山から朝日が顔を出して、わしの向かいの地藏さんの顔をポッと染めるころには、茶店のばあさまも、店の支度で大わらわじゃった。

棚に芋やまんじゅうが並べられ、そこらじゅうおいしそうなにおいがして、わしのいちばんごきげんなところじゃった。

こんなこともあった。「わっしょい、それおせ、わっしょい」とおめでたい荷物が通った。花嫁道具を乗せた大八車じゃった。そのあとをまたうら若い嫁さまが、不安顔で登ってくると、「おめでとう」とついわしは言ってしまうのじゃった。

また、遠く奉公に出る若者が、ここへ登って、もう一度ふるさとを振りかえっては、涙ぐんでいたものじゃった。そして、何年かたち、立派になって、ふるさとへ戻ってくる若者を見るたび、わしもうれしかった。

それからだいぶたって、わしの立っているふもとに、新しい道ができると、この峠を通る衆もとんと少なくなった。

でも、わしはこの峠をいつまでも、見守っていくつもりじゃよ。



奥多摩町の年中行事 9

正月行事つづき

17日 蘭玉かき 13日に飾ったまゆ玉飾りを取り  
 払いました。大人と一緒に子供たちも手伝って、枝に  
 さしたまゆ玉をかき取るマユカキは、笊(ざる)に入れ  
 たまゆ玉をあつで焼いたり煮たりして食べる楽しみが  
 ありました。まゆ玉を囲炉裏の灰の中で、蒸し焼きにし  
 て、灰をフーフー吹き払いながら醤油などをつけて食  
 べるのですが、現在では見られない食べ方かも知れ  
 ません。

馬頭まつり 牛馬を飼っている人たちが、小河内麦  
 山の馬頭さまにきれいに着飾った馬を曳いて参詣し、  
 絵馬を納めて1年の無事を祈願しました。絵馬は各自  
 が版木に彫ったものを半紙に刷って奉納しましたが、  
 中には意匠を凝らして彫ったものもあり、気に入った  
 絵馬があると他人が奉納したものを貰うけて、家に  
 飾ったといひます。

参詣が終わると宿で餅を搗き酒宴になりました。  
 川井尾崎の観音さまでは、里芋を煮て味噌をつた  
 芋田楽を参詣者にふるまったといひます。

20日 恵比寿講(えびすこう・えべすこう) ど  
 この家でも恵比寿さまを床の間や戸棚の中に飾り、あ  
 ずき飯をお椀にてんこう盛によそり、お頭つきの魚、  
 大根の酢の物、人参、ごぼうの煮つけなどを添えたお  
 膳を供え、晩に蕎麦やうどんを打って供え、家中揃っ  
 て食べました。正月の恵比寿講は、恵比寿さまが、旅

に出られるのを祝う朝恵比寿といひ、11月の恵比寿  
 講は、旅先からお金を背負って帰られるのを迎える  
 夕えびすといわれています。

21日 太子講 会場に聖徳太子の画像を掲げ、鏡  
 餅などをお供えし、線香を立てて拝礼してから、酒宴  
 となります。太子講は、聖徳太子の徳を敬慕する工  
 匠たちが組織をつくり年ごとに寄り合って、情報交  
 換や親睦の会を行っています。町内には、太子を祀  
 る小留浦の太子堂の他、石造塔も各所に残されてい  
 ます。

24日 火ぶせ祭り

この日は町内各所で愛宕神社や愛宕地藏尊(勝  
 軍地藏尊)に参拝し、火災がおきないことを祈念し  
 てお祭りをしました。

愛宕さまは火防の神様として、山頂や尾根筋など  
 の見晴らしのよい要所に祀られています。火防祭り  
 は、「精進まつり」とか「おしょうじん」と呼び、餅を搗  
 いたり、うどんを打ち、精進料理をこしらえてお日待  
 をしました。又、きなこ餅はつくりましたが、小豆は火  
 の色として忌まれたといひます。

[資料] 奥多摩町誌、広報おくたま  
 (奥多摩郷土研究会会員 岡部 義重)

この木なんの木

山神様の作品二題

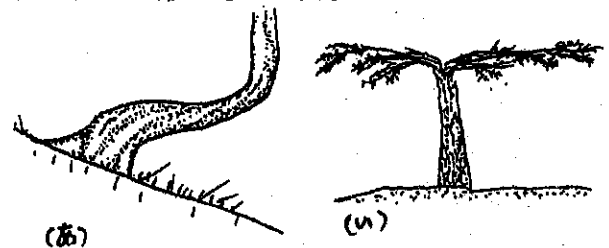
私が山で出会った山神様の作品を二つご紹介し  
 ます。そして、これらの作品をつくられた山神様の  
 手の内を、私なりにさぐってみようと思ひました。

(あ) は、都民の森に接する鞆口峠に近い尾根で  
 出会ったイヌブナです。このあたりの積雪量は平均  
 15~20センチ程度のことです(ビジターセンター  
 の話)。よって樹形への雪の影響は考えにくいので  
 す。おそらく、斜面に生えた幹は倒れまいと、おの  
 が体を引き上げながら伸びた結果、(幹の根元の形  
 に注目) 水平な形になったのでしょう。やがて幹を  
 生長させるホルモンが、重力によって幹の下方に偏  
 って分布し、ホルモンの分布が濃くなった側の生長  
 が盛んになって幹は立ちあがっていきました。そし  
 てそのままの形で樹幹全体が肥大生長し、この姿に  
 なったのでしょう。

(い) は、富士山五合目のお中道で出会ったカラ  
 マツです。枝が水平に張り出している所から下は、  
 冬季雪に埋もれる部分でしょう。積雪の内部では氷  
 点下にならないので芽は保護されますが、積雪から

はみでた部分は寒風にさらされ、芽は凍結、枯死し  
 てしまいます。

その結果としてテーブル状の樹形ができあがった  
 のでしょう。ちなみに、カラマツの幹は本来すなおに  
 直立して伸びる性質があるので、いかにも座りのい  
 いテーブルの形になりました。



森を歩いていると時折、幹の枝が奇妙によじれて  
 いる木を見かけます。山の神様が、ご自分の山の木  
 の棚おろしをする時、生えている木の本数を数えや  
 すいように、何本かおきにつけた印だと聞いたこと  
 があります。なるほど。

(橋上 一彦)

## イベント案内

8月、9月のイベントは、下記の7回ですが、全て、「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内いたします。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号を明記の上、当観光協会へお申し込みください。

No.17 8月2日(土) 神庭の夜神楽 ※解散 21:30

白丸駅～神庭(神楽見学)～奥多摩駅

応募締切日 7月19日(ハイキング)

No.18 8月9日(土) 夏休み親子体験 養殖センターと虹鱒釣り

白丸駅～さかな養殖センター～つりぼり～奥多摩駅

応募締切日 7月26日

※会員の同伴が必要です。お子様の年齢は原則5歳以上とします。入会不要ですが、虹鱒釣り料金が必要です。

No.19 8月21日(木) 親子ハイク 御岳山とロックガーデン

御嶽駅～滝本(ケーブル)～ロックガーデン～丹三郎～古里駅

応募締切日 8月7日(木)(登山)

※会員の同伴が必要です。お子様の年齢は小学4年生以上と限定させていただき、入会不要です。会員の単身参加も可能です。

No.20 8月29日(金) 川苔山(コース変更あり)

奥多摩駅～川乗橋～川苔山～鳩ノ巣駅

応募締切日 8月15日(金)(登山)

No.21 9月12日(金) 山里歩き② 小丹波・棚沢

古里駅～鳩ノ巣周辺

応募締切日 8月29日(金)

No.22 9月18日(木) 奥多摩三山③ 大岳山

御嶽駅～大岳山～奥多摩駅

応募締切日 9月4日(木)(登山)

No.23 9月25日(木) 越沢溪谷の巨樹を訪ねて

古里駅～寸庭～松ノ木尾根～巨樹～鳩ノ巣駅

応募締切日:9月11日(木)(登山)

※ 今期のイベントのうち、登山に関しては、雨天による中止がいくつかありましたが、下期に再行されるものがあります。詳細は、右記にお問い合わせください。

## 施設案内

### 宇佐美豆腐店

伝統を誇る昔ながらの手造り豆腐を製造している当店は、東京都豆腐商工組合よりの大豆を使用しており安全安心、鮮度が違う、味が違います。豆腐は絹ごし、木綿、おぼろの三種類があり、がんもどき、油あげ、こんにゃくも製造しており、おからは福祉会館内にある、カフェ・タンポポハウスで、おからスコーンとして売られており大好評です。

奥多摩町氷川174 (奥多摩ビジターセンター前)

Tel : 0428-83-2403

営業時間 9時～17時

定休日 日曜日

## 登山・ハイカーの方々へ

- 奥多摩むかしみちは、大雪による崩壊箇所があり、生活道路を除き、9月末日まで全面通行止めです。
- 白丸湖右岸の数馬峡橋～鳩ノ巣方面の遊歩道も引き続き通行止めです。
- 今季の大雪のため、登山道が荒れています。入山前に町役場や当観光協会、奥多摩ビジターセンター等のHPで事前にご確認ください。

平成26年度

## 登山・ハイキング会員募集

奥多摩観光協会では、当観光協会が主催するイベントの参加者を募集しています。

26年度会費1,000円で年5回参加すれば、奥多摩温泉「もえぎの湯」の無料券(700円相当)をプレゼントします。ただし、各回参加費700円。

会員登録は、最初に参加するイベント当日に手続きを行ってください。詳しくはJR奥多摩駅前にある観光案内所にお問い合わせください。

電話 0428-83-2152

次号発行予定：平成26年10月15日

発行	一般社団法人 奥多摩観光協会
住所	〒198-0212 奥多摩町 氷川 210
電話	0428-83-2152 Fax 0428-83-2789
編集	名人・達人観光ガイドの会